

スピノザの自然主義プログラムを推進するのは誰か？

立花達也 (大阪大学) t.tachibana0710@gmail.com

いくつか深刻な間違いのみ修正してあります

「スピノザの自然主義プログラムを推進するのは誰か？」という問い

- もちろん、その答えはまずもってスピノザ（とスピノチスト）である
- そのうえで、**(1) いわゆる「自然主義者」は推進者に含まれるのか**を問いたい
- この問いはさらに、この「自然主義プログラム」をひっさげて、現代の形而上学者などに売り込んでいけるかどうかにも関わる。**(2) このプログラムは多くの人**
が推進するに足るような魅力をもっているのだろうか

(1) はこの本の企図や「自然主義」の扱いに関する批判にかかわる。

(2) はこの本の可能性をどのように引き延ばせるのかという観点にかかわる

隠さずに言うと、評者には木島さんに対して批判したいことが山ほどある

ほしくないのだが

しかし、勘違いしてほしいが、以下の2つの試みに評者は賛同する

- いわゆる「自然主義」の観点からスピノザを評価すること
- 現代形而上学の知見によってスピノザを説明すること

これらに正面から取り組んだ仕事は、少なくとも日本ではなかったと思うし、評者としては、それだけでもありがたいと思っている

だが、それはなお **(おそらく木島さん自身にとっても) 乗り越えられるべき仕事**であると言いたいのである

目次

1. スピノザの自然主義プログラムはなぜそう呼ばれるか
2. 現代の議論を用いてスピノザを説明してどうするのか

1. スピノザの自然主義プログラムはなぜそう呼ばれるか

最近の木島さんの仕事

- 『自由意志の向こう側』では、『エチカ』第一部付録がジョイントとなることで、決定論と自由意志、運命論、（自然化された運命論としての）進化論が合わせて論じられている。
- 第一部付録の目的論的自然観の批判は「はじめに」で議論を先導したあと第7章「運命論のこれから」でカムバックする



最近の木島さんの仕事

- 『自由意志の向こう側』では、『エチカ』**第一部付録**がジョイントとなることで、決定論と自由意志、運命論（自然化された運命論）が合わせて論じられる
- 『スピノザの自然主義プログラム』でも、**第一部付録**のテキストを根拠にスピノザの核となるアイデアが示され、それに従い決定論および唯現実論（現実主義）と力の理論が提示される



この本は「スピノザの自然主義」を論じたものではない？

あくまで論じられているのは「スピノザの自然主義プログラム」

1. **自由意志概念の否定を伴う決定論または必然主義、
およびその帰結としての唯現実論**
2. **目的論的自然観の徹底的な否定**
 - それは「批判的課題」であるとも言われている

自由意志と目的論的自然観という二つの先入見が人間の認識を歪め、スピノザが見いだした哲学的真理の受容を拒ませている、という認識がスピノザにはあり、それゆえこの二つの先入見に対する徹底的な批判が、スピノザ哲学の大きな課題となる。(p. 4)

この本は「スピノザの自然主義」を論じたものではない？

- 少なくとも「自然主義」についての形式的な規定は無いはず
- それは**自然主義的人間観**ないし**自然内在的な人間観を指す**とは言われている

例えばデカルトのような自由意志を備えた非物質的精神や、世界を創造した人格的超越神、またアリストテレスのような目的論的原理なしの、自然に内在する機械論的物理法則だけによって人間の営みが全面的に決定されているという見方を指すと言ってもよい (p.4)

- この本は、手続きとしては (a) 決定論あるいは必然主義と、それに伴う (b) 自由意志否定論のことを「自然主義」と呼ぶことにしているのであり、**それらがどうして自然主義と呼ばれるかについては沈黙していると思われる**

「自然主義」という言葉がバズワードになっているのでは、という疑い

- 他方で、自然主義を根拠にある立場を排除するという議論も見られる。
 - たとえばギャレットらの「必然主義」を批判する箇所

我々が見るところ、一見してよりラディカルなギャレットらの解釈は、我々がまさに神の力の表現そのものとして特定した個物間の因果的必然性の上位に、それを制約する、充足理由率と結びついた形而上学的必然性を据える点で、反自然主義的な性格をもつ (209)

- そして木島さんは「形而上学的原理」を置かないカーリーが「より妥当」だと判断する。こうした判断が成り立つためには、**自然主義的であるとはどういうことであり、それがなぜ推奨されるのかの議論が必要不可欠だと思われる**

「なんとなく自然主義（的）と言ってしまう問題」はみんなの問題

すぐさま注意しておきたいのは、「自然主義」をしっかりと特徴づけずに言ってしまうのは、誰にもよくありがちだろうということ

- ほとんどの分析哲学者は「自然主義者」と自称するのが一般的らしい
- これはきっちりとした共通理解がないためであり、いざ「自然主義」を特徴づけようとするとも議論は複雑になる（という事情だろうと理解している）
- あとで触れるが、政治哲学の文脈でもスピノザは"naturalist"とされてきたらしい

スピノザにおいて「自然主義」をどう考えるべきかを、木島本をきっかけに、哲学史研究者全員の問題として考えていけたらよいと思っています。

これは「自然主義の定義が困難であるから仕方ない」という話ではない

かさねて注意しておきたいのは、これはnaturalismの本質的な規定が困難であるという事実とはあくまで独立であるということ

- ある特定の解釈や言説を、それが「自然主義である／ない」がゆえに擁護／否定するためには、少なくとも以下のステップが必要だと思われる
 - i. 自分がどのような定義で「自然主義」の主張を考えているのかを示す
 - ii. その「自然主義」をとるメリット／それに反することのデメリットを示す
- 木島さんにとっての^{自然主義}~~目的論~~が「決定論」と「反目的論」のセットであるにしても、同様の作業はそれらに対しても必要になるだろう

自然主義者は自然主義プログラムを推進してくれるのか？

そういうわけで、木島さんにとって自然主義プログラムとは下記の二点である

- 決定論および唯現実論
- 反目的論

かつ、各々の形式化はなされず、またそれらが自然主義的であるとはどういうことかも、自然主義の暫定的な規定もない以上、明らかにされない

ここからだけでも、**自然主義プログラムの推進者とは、（それがどのように規定されるにせよ）いわゆる「自然主義者」とは言えないことになる**

次回作ではぜひともこの問題に対する対処が必要である

スピノザの「自然主義」を真剣に考える

もちろん、様々な議論を寄せ集めるためのなんとなくの「自然主義」「自然主義的人間観」のイメージだけがあればよいのかもしれない。しかし、次のような議論もある

「スピノザは自然主義者だったのか？」 (Douglas 2014)

二種類の自然主義を取り上げ、スピノザはいずれでも「ない」と主張している

1. 存在論的自然主義 *ontological naturalism*

2. 方法的自然主義 *methodological naturalism*

- 予め言っておくと、彼は「超自然的なものを排除する」というスピノザのスタンス自体を認めていないわけではない
- また、後者の否定に関しての議論は少々歯切れが悪い

スピノザは存在論的自然主義者ではない？（ざっくりとした論旨）

1. 存在論的自然主義を特徴づける一つの仕方として物理主義を想定するとしても、スピノザは物理主義者ではありえない
 - 物理主義（＝物理学が認知する存在者以外の何ものも世界に含まれない）に反すると思われるのは、スピノザが思惟属性を神いうなら自然の本質を構成するものとして認めているということである
2. 物理主義なしの自然主義が可能であるとしても、なお反論がありうる
 - 「無限の属性」をもつ実体としての神をどう考えるのかわからない
3. **より弱い形式の自然主義**ならばテキストと一致するが、それはスピノザの哲学を理解するうえで役に立たない。

1. 存在論的自然主義を特徴づける一つの仕方として物理主義を想定するとしても、スピノザは物理主義者ではありえない
2. 物理主義なしの自然主義が可能であるとしても、なお反論がありうる

これらについてはおそらく、**スピノザを物理主義に寄せるアイデアが木島さんにはある**と思われる。のちに出された紀要論文で展開されているので、ここでDouglasのアーギュメントをブロックできるかもしれない

他方で、(3の)「弱い形式の自然主義」はおそらくすべてのスピノザ研究者が認めるであろうから、この線について検討すべきだろう

弱い形式の自然主義

スピノザの考えはおそらく「**人間もその他のものも皆、同じ法則にしたがう**」という意味での自然主義ではあるだろう。Della Roccaの考える「自然主義」はコレ

スピノザ自身の考えは、人間とその他のすべては同じ諸法則にしたがって動くというものである。このような説明原理の統一化は、心理学に関するスピノザの自然主義の核心をなす。人間の心理は岩やテーブル、犬を支配するのと同じ諸原理によって支配されるのである。(Della Rocca 2007, 852)

実際にスピノザ自身、人間を「自然の他のものから独立したもの」、「自然の外にあるもの」のようにみなすことを、下記を根拠に批判する。

自然はつねに同じであり、自然の力と活動力能はいたるところ同一である (...) いいかえれば、万物が生起してある形相から他の形相へと変化するもととなる自然の法則および規則はいたるところ常に同一である (『エチカ』第三部序言)

弱い自然主義は弱すぎる

スピノザの「自然主義」は、人間を自然の法則と独立な法則に従う可能性を排除すること、つまり「**超自然的なもの**」の排除として規定できるかもしれない

- しかし、何が自然的であり、なにがそうでないのかをどう決めたらよいのか？
 - 「人間とその他のすべては同じ諸法則にしたがって動く」というとき、たとえば「ある理論が新しい種類の存在者を仮定するとき、その理論が、新しいメンバーを受け入れるために、認識されている自然の秩序に変更を加えることを提案することは許されるのか。もしそうでなければ、量子力学やニュートン物理学の時代の重力はどうなるのだろうか」 (Douglas 2014, 5)
- これはスピノザの哲学的な立場を実質的に特徴づける役に立っていない

- 自然主義をスピノザに帰する者たちの主戦場の一つは心身問題である（「結びと展望」を見る限り、木島さんもこの方向へ展開するかもしれない）
- 法や規範のプラトニズムへのアンチを張る基礎としての自然主義もある
 - Steinberg は、SEPの記事（「スピノザの政治哲学」）でスピノザの自然主義を、以下のテーゼのあつまりとして定義する
 - a. 万物は神の自然の法則から必然的に存在し行動する (EIP29 and EIP33)
 - b. 自然は何らかの目的・目標があって行動するのではない (EI Appendix)
 - c. 自然はどこにでもあり常に同じである (EIII Preface)
 - これら三つの連言から「人間の行動は、他のすべてのものの行動と同様に、神または自然の不変かつ非摂理的な法則によって完全に必然化され、かつそれによって説明可能であること」が出てくる

スピノザは方法論的自然主義者ではない？

Douglasは彼なりに方法論的自然主義に関する議論を追ったあとで、論文においてスピノザのそれとして検討する方法論的自然主義を以下のように規定する

具体的な対象の世界に関する信頼できる知識はすべて経験的であるという考え方。つまり、こうした知識は理論的な考えを取り上げて、それを観察にさらしてみることによって見出される (Douglas 2014, p. 8)

- こうした規定それ自体にも問題は含まれるだろうが、出発点としては十分
- これはよく言われる「**第一哲学の拒否**」という規定とも合致すると思われる

前提として

- 『神学政治論』における科学的・経験論的アプローチは評価すべき
- デネットが評価するように、神 = 自然という定式が、神学的な探求と科学的な探求を一致させているという側面もたしかにあるだろう
- また個人としては、スピノザが個別的な身体への触発に基づいて様々な知識を得ることを重視していると考えており、こうした点を否定する気もない

しかし、おそらく木島さんも認めるであろう以下の点は気になる

- **神 = 自然の本質や諸特徴についての理解が経験的な方法によって得られているわけでも、それによって検証されているわけでもない**

木島さんの自然主義的アイデアの源泉としての第一部付録

スピノザが目的論的自然観と自由意志の錯覚の共犯関係を暴いたのは、人々がなぜスピノザの必然主義を受け入れようとしなかったのかを説明するのが狙いだった (...) (木島2020, 300)

木島さんがとる手続きは、下記の通り (cf. 4-6)

1. 「決定論あるいは必然主義」とそれに伴う自由意志否定論が『エチカ』第一部の核心であるとしたうえで、
 2. 目的論的自然観と自由意志の批判を、このような思想の受容を妨げる先入見の除去を目的とした批判として定める
- これはつまり、自然主義プログラムがあくまで**補足的な役割**を担うということ
 - 事実、この本で論じられるとおり、その核心それ自体は**幾何学的論証によって与えられている**のである

どうすれば木島さんの本が悪性でなくなるのか

1. 自然主義（プログラム）のもとに集まるものを束ねる規定は与えられていないので、それを根拠に特定の主張を擁護したり否定したりすることをやめる
 - これはそもそも、個別の主張に対して個別のアーギュメントが与えられていたら問題はない。アーギュメントなしに「自然主義的である（ない）こと」が根拠になることがあるのでそれがまずい
2. 自由意志論・目的論的自然観がどのような問題を生じさせるのか、反自由意志論・反目的論がそれ自体でどのようなメリットをもっているのかを一章つかって論じることで、後の判断の基準とする
 - 「自然主義的」・「科学的」というだけでは根拠にならない。木島さんが自然主義の特徴づけをする気がないならなおさらである

2つめの提案に関しては、『エチカ』第一部付録のより詳細な読解が役立つと思う

木島さんは『エチカ』のなかでも比較的な長大なこのテクストのなかでも、さわりの部分にしか触れていない。だがスピノザは、

- 偏見の誤りを示したあとで、「**この偏見から善と悪、功績と過罪、賞讃と非難、秩序と混乱、美と醜その他こうした種類の他のことどもに関する諸偏見が生じたか**」を示そうと試みている
 - これは自然主義プログラムの動機ないし目標と考えられる
 - そして、これは『エチカ』の他の様々な個所にも関わる考え方である

「人間とその他のすべては同じ諸法則にしたがって動く」というような考えは、**科学的探究と関連させるときにはなお曖昧さを残すかもしれないが、ヒエラルキーや規範に対するラジカルな批判に対しては十分だったのではないか**

2. 現代の議論を用いてスピノザを説明してどうするのか

現代形而上学での議論によってスピノザを再構成することの意義

- 現代形而上学において多岐にわたる思考ツールが準備された今こそ、スピノザというよくわからない哲学者の考えがそれらのツールを使用して理解可能になったのだ、という考え方があると思う
- だがそれは最終的には、スピノザを読む意義を失わせるのではないか？
 - もちろん「それでOK」という態度もありうる
 - 評者は、**うまく再構成しきれないところ**にスピノザの面白みを見出したい
 - 木島さんの考えを聞いてみたい

現代形而上学での議論によってスピノザを再構成するとはどういうことか①

評者の考えでは、この試みはツーステップから成る

1. スピノザという対象を現代形而上学のパーツを使ってつくってみる
2. つくりあげたスピノザがちゃんと動くのか確かめる

第2のステップを実際に構成しているのはおそらく次の2つ（どちらも問題なしとは思っていない）

- i. つくりあげたスピノザが本当にスピノザらしいのかチェックする
- ii. 現代形而上学として問題なく動作するのかチェックする

現代形而上学での議論によってスピノザを再構成するとはどういうことか②

- 現代形而上学のパーツを使用する以上、スピノザを再構成するために使った複数の形而上学的パーツが相互に矛盾しないかの点検が必要不可欠
 - 現代形而上学のつまみ読み、互いに非整合な形而上学的パーツの使用は推奨されない。なぜなら、それはスピノザがどうこう以前に「**動かない**」から

スピノザ研究者にとって何がうれしいのか

- スピノザのこと（正確にはスピノザ哲学を成り立たせる十分条件）がわかる
- つくりあげたスピノザの動作から、スピノザ哲学の自明でなかった特徴が明らかになったり、現代のさまざまな議論との比較がしやすくなったりする

スピノザ研究者以外にとって何がうれしいかもしれないのか

現代形而上学によってスピノザを再構成する仕事はしばしば下記のプロセスを踏む

再構成の失敗 → 現代形而上学的パーツの開発 → 再構成の達成

- 既存の形而上学的パーツを用いるだけではスピノザをつくることができないと分かれば、自前で形而上学的パーツを開発する必要がでてくる
- スピノザを再構成するという仕事は基本的には、スピノザが正しいとか、それ自体で再構成する価値があるといった前提のうえにあるので、誰にも勧められることではない。しかし、以下の副産物にはそれ自体で意義があるはずだ
 - i. 現代形而上学においてまだ検討されていないオプションの発見と検討
 - ii. 様々な個別の学説のあいだの関係づけ

スピノザの自然主義プログラムは「動く」のか？

現代形而上学の鍛えなおしを促す という観点のもとでは、**現代形而上学を用いた再構成がうまくいかないところ**にこそ学術的な価値があると言える

- そして、おそらく木島本にはいくつかの「荒業」が見られる。
この個所をチャリタブルに引き受け、引き延ばせればよいのでは？
- しかし評者は、そもそも再構成が達成していないのではないかと疑っている。いかえれば、このスピノザは現代形而上学として問題なく動作するのだろうか？
 - 以下では一例として様相に関する議論を取り上げる

第10章 (pp. 208-212) の議論を検討する

前提：研究史上、Garrettの**必然主義** (strict necessitarianism) と、それより弱いCurley & Walskiの**必然主義** (moderate necessitarianism) の対立がある

議論の再構成

1. strict necessitarianismには、moderate necessitarianismに比べて形而上学的原理という余分なものが載っている (strict necessitarianism = determinism + 形而上学的原理PSR) のでmoderate necessitarianismのほうが好ましい。
2. しかし、Masonに従えば、上記の二つの立場はいずれも可能世界論に基づくので、間違っている (ちゃぶ台返し)
3. actualismはstrict necessitarianismやdeterminismとは独立に担保される。

1. 木島さんがmoderate necessitarianismを選好する議論について

木島さんはCurley & Walskiによる「穏健な必然主義 moderate necessitarianism」の方にシンパシーをもっている

- necessitarianism vs. non-necessitarianismの議論はいまも続行中なので、こうしたポジショニング自体には何も言うことはない
- しかし、木島さんのアーギュメントは色々な意味でまずいと指摘しておきたい
 - i. PSRと必然主義を結びつけたうえで、PSRを反自然主義的として必然主義もろとも退ける議論について
 - ii. 必然主義はスピノザというよりライブニッツ的だという考えについて

i. PSRと必然主義を結びつけたうえで、PSRを反自然主義的として必然主義もろとも退ける議論について①

一見してよりラディカルなギャレットらの解釈は、我々がまさに神の力の表現そのものとして特定した個物間の因果的必然性の上位に、それを制約する、充足理由律と結び付いた形而上学的必然性を据える点で、反自然主義的な性格を持つ (209)

- 充足理由律 (PSR) がいかなる意味で反自然主義的であるのか、反自然主義的であるとどういう悪さがあるのかが論じられていない。

すべて物についてはなぜそれが存在するか、あるいはなぜそれが存在しないかの原因ないし理由が指示されなくてはならない (E1P11D2)

- PSRはいわば、基礎付け主義の極端なバージョンであり、それ自体で超自然的なテーゼとは言われえないだろう (Della Roccaはむしろ、PSRから彼なりの「自然主義」を導いてすらいるのである)

i. PSRと必然主義を結びつけたうえで、PSRを反自然主義的として必然主義もろとも退ける議論について②

- そもそも、**PSRと必然主義は独立の主張である**はずなので、PSRを否定することは必ずしも必然主義を否定することにはならない。
 - 元々のGarrettの議論はPSRなしで成り立っている
 - PSRから必然主義が帰結するとは主張できるはず。だがもちろん、それによって必然主義を否定することはできない
- だから当然、PSRが仮に反目的論的である（あるいは穏健に言って目的論的に勘違いされる）からといって、必然主義を退けるには足りない

ii. 必然主義はスピノザというよりライプニッツ的だという考えについて①

- 前提として、そもそもこれはどちらかの立場に軍配をあげる根拠として弱い
- 木島さんの疑いに反して、スピノザを鋭くライプニッツから切り離す、というのが必然主義者の基本的なモチベーションだと思われる
 - (あえて言うなら) ライプニッツにより近いのはCurley & Walskiの解釈であるというのが一般的理解では? moderate necessitarianismは有限様態の系列が別で在りえたこと(可能世界)を肯定するので、なぜ現実世界がそのようであるのかを問う余地を残し、ライプニッツの問いを誘発する。
 - **こうした余地を初めから排除する**のがstrict necessitarianismであるはず。

木島さんの疑いは、HuenemannがCurley & Walskiに向けた指摘に基づいている。

- Huenemannは「あなたのスピノザはなぜある可能宇宙が現実的であり、その他の可能宇宙がそうでないのかを説明できない。この宇宙が現実的でその他の宇宙が現実的でないことは、神についてのいかなる事実にも基づかないブルートファクトになる」と言い、これがPSRと矛盾すると指摘している
- 木島さんはこの指摘がライブニッツ的・目的論的発想だと言って非難するが、
 - これはmoderate necessitarianismを否定する根拠であり、（すでに述べた通り）strict necessitarianismを主張するための必要条件ではない
 - また、Curley & Walski (1999) での応答は、PSRの無制限の使用を否定するアーギュメントを提示しているのではなく、たんに拒んでいるだけである。むしろ彼らの議論は、**唯一可能な説明を科学的説明にとどめたいならば、可能世界を認める（=唯現実主義を捨てる）必要がある**ことを示している

2. Masonを使ったちゃぶ台返しについて

これはちょっと難しい問題になりそうなので詳述できません。しかし、

- Masonによる、スピノザが論じているのは命題ではなく物 (res) についての必然性だけだ、という主張は、どこにまで及ぶのかを再検討する必要がある。
- しかし、これはまさにちゃぶ台返しなのであって、以下で問題とすることとはさしあたり独立と見てよいと思われる

3. 木島さんのactualismについて

そもそも、strict necessitarianism = actualism だったんじゃない？

この本の論旨を追うことを難しくしている理由の一つは、唯現実主義はスピノザ研究史上はギャレットの「(強い) 必然主義」を通じて見いだされた（と評者は理解している）にもかかわらず、唯現実主義を排除するカーリーらの立場に（部分的に否定するにせよ）親和的であるということである。

- (強い) 必然主義：この現実世界が唯一の可能世界である（=可能なものはすべて現実的である）
- 弱い必然主義（決定論）：ある時点での世界の完全な記述が与えられるならば、その後のどの時点の世界の状態も自然法則によって決定される（他でもありえたような他の可能世界を許容する）

いま振り返れば、(強い) 必然主義の定義は唯現実主義そのものである。

木島さんの必然主義について①

木島さんはCurley & Walski (1999)に軍配を上げるが.....

- Curley & Walski (1999) の"moderate necessitarianism"は、「自然において生ずるあらゆるものはある普遍的な自然法則を例化する」という主張を含むはず
- これはスピノザにおいて自然法則は個物の力に基礎づけられるとする木島さんの解釈と衝突するのではないか。
 - 木島さんは第一部定理29の解釈から、EllisやMumfordとの共通性を見いだしている (n. 144, n. 162参照)
 - ちなみに評者もこの路線でいけると思っています

木島さんの必然主義について②

Curley & Walski (1999) は、スピノザのテキスト解釈から、**必然性のスコープをいわば科学の検証が可能な範囲にのみ絞るべき**だという主張を取り出しているのであって、それゆえstrict necessitarianismを退け、**(ライプニッツ的に言えば) 可能世界の存在を許容すべき**だと言っているのである。

- moderate necessitarianismをとるのであれば、**唯現実論 (actualism)** はとれない
- 逆にいえば、strict necessitarianismははなから形而上学的な主張なのであり、また同様に、**唯現実主義も形而上学的な主張である** ということ

→ 木島さんは、不可能な「良いとこ取り」をしているように見える

※ **この本で唯現実論の定義が与えられていないこともこのことに影響していると思う**

唯現実論 (actualism) はそもそも形而上学的主張なのでは？

木島さんはこの本で一度もactualismを形式的に定義していない。
理解の助けになりそうな箇所は以下のとおり

自然の内には偶然的なものは何もなく、むしろ万物は神的本性の必然性によって一定の様式で現実存在し働くように決定されている。(E1P29)

諸事物が神によって〔現に〕算出されたのとは異なった様式において、または異なった秩序において産出されたということはありません。(E1P33)

これはつまり、**現実に生じた、生じつつある、今後生じる以外の事柄は生じることがあり得ない、という厳格な唯現実論の主張**であり (...) (205)

- 引用は明らかに必然主義の内容。必然主義から唯現実論は帰結する (156も参照)

唯現実論 (actualism) はそもそも形而上学的主張なのでは？

- 「現実にかかる事態以外は起こることが可能ではない」という主張と仮定しよう
 - これは明らかに様相が関わる主張である。いいかえれば、「現実世界のみが唯一の可能世界である」という主張だと解される
- ちなみに言う場所がないのでここで指摘しておく、木島さんは混同しているように見えるが、これは「メガラ派的唯現実論」とは異なるはず。それはMolnarが形式化しているとおり、力にのみ関わる主張であるから（もっと言うと様相表現すら定義に出てこない）

スピノザにとっては因果的な必然性が数学の厳密な必然性と同程度の強度をもっていたのであり、それゆえスピノザは因果的な必然性と因果的な不可能性に関する必然主義者であり、因果的に理解されるべき偶然性と可能性を消去する唯現実論者なのである。それゆえ、スピノザの唯現実論は、前述のモルナーや、「可能存在 (possibilia)」の存在を積極的に認めるバードのような唯現実論批判者とは (...) 以前鋭い緊張関係に立ち続けると見られよう。(212)

- 「因果的な必然性」を (causationの議論と受け取りたくなるがおそらく違うので) たんに因果決定論の表明だと理解する
- 「因果的に理解されるべき偶然性と可能性を消去する」 ???
 - 木島さんなりの唯現実論を理解する必要がある

木島さんのactualismのアーギュメント？

我々は、スピノザが論理矛盾をはらまない別の共可能的な世界なるものを、この現実世界と両立しないがゆえに因果的に不可能である、と判定する (211)

これが本当にわからない。

- 因果的なつながりがあることはむしろ、同じ世界を構成することと同義だろう
- (少なくともルイスによれば) 可能世界同士は因果的に比較することはできない

→ 要するに、**ここでは様相の話をもっとくしていないと解される**

評者には、これはたんなる因果決定論 (あるいはもっと弱く、因果的閉包性?) を表明しているだけのように見える

「緊張関係」なんて本当にあるのだろうか？

たんに決定論について述べているだけなのに、そこから下記は取り出せないのでは？

現実に生じた、生じつつある、今後生じる以外の事柄は生じることがあり得ない (205)

あるいは仮に「**形而上学的な可能性についてはタッチしないですよ**」という穏健な主張が木島さんの真意だとすれば、形而上学的な可能性について議論している以下は緊張関係であるどころか、**まったくの無関係なのではないか？**

スピノザの唯現実論は、前述のモルナーや、「可能存在 (possibilia)」の存在を積極的に認めるバードのような唯現実論批判者とは (...) 以前鋭い緊張関係に立ち続けると見られよう。 (212)

実際に、木島さんに事前に送った質問に対する応答には、

「因果的必然主義」から「因果的唯現実論」が導かれ、これが自分の立場だ

とありました。評者の読みはある程度正しかったと思われる。大きな問題は、

- 「因果的唯現実論」なるものが、「現実に生じた、生じつつある、今後生じる以外の事柄は生じることがあり得ない」ということを主張することがはたして出来るのか、ということ
- 「スピノザが命題が真か偽かといった話をしていない」というネガティブな主張から、現実世界以外の可能世界を排除する（形而上学的な）ポジティブな主張を引き出せるのか、ということ

モルナーの議論をそのまま使っちゃダメなのか？

木島さんの考える必然主義・唯現実主義は因果にしか関わっていない

スピノザは因果的な必然性と因果的な不可能性に関する必然主義者であり、因果的に理解されるべき偶然性と可能性を消去する唯現実論者なのである。(211)

→ であるならば、モルナーやバードのような唯現実主義批判者との「鋭い緊張関係」は実際には存在しないのではないか。

- モルナーは力の消去主義者の代表としてのメガラ派的唯現実主義者に対して反論しているだけであり、様相に関するactualismに関しては中立的だと思われる
- それどころか、可能世界論を用いたnecessityによる説明の限界を指摘したうえで力能の重要性を主張するので、様相に関するactualistの味方ですらある

モルナーのどこがダメなのかをはっきりさせてほしい

木島さんによれば、モルナーのダメさは以下に要約される

モルナーらの力の概念は、スピノザが「自然の秩序の転倒」と呼んだ隠伏的な目的論的様相をその核心に宿していた。一方でスピノザの力の概念は慣性的な〈現前する有への固執〉を基本的な原理としている。(…)この立場がそれ〔=アリストテレス主義の部分的復権を支持すること〕によって近代科学の基本前提と相容れない思想を導入しているとしたら、それは一つの問題であろう。(249)

1. モルナーの力の概念が**目的論的な要素をもっている**。かつ、
2. **この要素が近代科学の基本前提と相容れない**がゆえにダメである

→ 本当なのだろうか？ 木島さんはすでに様相概念を、そしておそらく目的概念も多義的に使用している。個別のアーギュメントなしに、これまでの議論からトリビアルに導かれるとは到底思えない。

スピノザからモルナーへの提案はどのくらい妥当なのか？

木島さんのスピノザ解釈による「形而上学的パーツの開発」の一つが以下である。

本来、「力」と「権限」は、不可視のものを可視的なものによって同定するための理論的概念であるが、モルナーによる「結果」と「顕現」の峻別は、「顕現」と「力」の一対一対応を守ろうとするため、「顕現」を本来そうであったはずの「可視的なもの」から「不可視的なもの」に転じている。しかるに、不可視なるものはあくまで可視的なものを説明するための理論的要請なのだとすれば、不可視的なものが二つ以上与えられる場合、不要な存在者を減らすという原理に従い、説明から「力」なる不可視の存在者を取り除き、可視的な「結果」と、それを構成する単独では観察不可能な「顕現」の二つのみを残せば十分ではないか、という理論的提案が考えられる (246)

木島さんは、一つの結果に対して、複数の力が参与することがありうるという点に着目して、「顕現」という道具立てを消去できるのではないかと提案している。

→ 次のスライドではざっと思いつく疑問を書いたが評者も傾向性主義については素人なので、あくまでオープンクエスチョンとして理解されたい

- 顕現は「不可視なるものはあくまで可視的なものを説明するための理論的要請」なのか？（役割が別にあるならオッカムの剃刀では削れない）
 - モルナーは正確には傾向性は顕現によって同一性を得ると書いている
 - 傾向性は顕現せずとも独立性をもって存在している
- この方向で真面目にやるのなら、モルナーがやっている汎傾向性主義批判に対する再反論（つまり**汎傾向性主義擁護**）が必要だと思われる
 - スピノザの「すべてのものが力をもつ」という主張は、モルナーの枠組みにおいては汎傾向性主義（pan-dispositionalism）と対応するかもしれない
 - ところで、directednessは傾向的な性質と非傾向的な性質を区別するために必要となっている（モルナーは性質の二元論を採っている）
 - 汎傾向性主義をとるのであれば、directednessの意義が弱まるので、もしかすると木島さんのような議論が成り立つかもしれない

木島さんは事前に送った質問への回答でこう述べている。

誤解があるといけないので追記しますが、モルナーのdirectednessを使うな、という帰結は拙著のスピノザの思想からは出てきません。モルナーのdirectednessに該当する概念はスピノザ主義的な枠付けを施された上で、存続できます（だから、「そのまま使うな」にはなるかもしれませんが）

なるほど、そうなのかもしれないが、それは本当に動くのかと尋ねたくなる。

木島さんはしばしば、コアとなるテーゼと、交換可能なオプションの識別ができていないと思われる。なので、他のパーツに甚大な影響を与えるようなパーツを軽々しく交換できてしまう。

もし再構成されたスピノザが形而上学的に動かず、しかしそれがスピノザなのだと言うのだとしたら、それはスピノザが矛盾した哲学者であることを示す帰謬法になる

まとめ

「自然主義プログラム」を推進するのは誰か？ それに対する応えは**現状では**、

- 自然主義者ではない
- 形而上学者ではない

しかし、「自然主義プログラム」そのものは改善可能であるはずであり、スピノザの自然主義的な思想に共感する者、現代形而上学とスピノザを比較することに興味をもつ者は悲観する必要はない